

029
157
1

諸國月對
大正
都鄙



827
157
1

東女知愛
第11160
書圖

正徳四

九月 年余歳
又後見

言水

湯虎の所と趣ぬる小庭

花毎つ用く楳十分盈科

史記の條莫比虫も勤初し又雨

全

蕉園かく在れぬ露の粟

柳況く世ハ梅のくれ言水

書近り揚矣し雲の空く盈科

全

立たるる台の中や袖袂打

都鄙の潤子と合寸七さ又雨

果舟し小玉しはく雲の鏡哀

元日

佐保^{新定と改して}や織女^{新定と改して}の雨の子と云元

三采宮衣^{新定と改して}撰の本目と初日^{新定と改して}の

く^{新定と改して}の^{新定と改して}や^{新定と改して}も^{新定と改して}く^{新定と改して}母^{新定と改して}修^{新定と改して}く^{新定と改して}新^{新定と改して}地^{新定と改して}貞恒

梅^{新定と改して}の^{新定と改して}香^{新定と改して}や^{新定と改して}今朝^{新定と改して}の^{新定と改して}息^{新定と改して}乃^{新定と改して}俾^{新定と改して}天^{新定と改して}儀^{新定と改して}ト^{新定と改して}誰

大^{新定と改して}正^{新定と改して}子^{新定と改して}云^{新定と改して}立^{新定と改して}り^{新定と改して}庚^{新定と改して}子^{新定と改して}の^{新定と改して}心^{新定と改して}も^{新定と改して}郁^{新定と改して}お

日^{新定と改して}の^{新定と改して}也^{新定と改して}や^{新定と改して}山^{新定と改して}笠^{新定と改して}市^{新定と改して}代^{新定と改して}の^{新定と改して}露^{新定と改して}露^{新定と改して}也^{新定と改して}寸^{新定と改して}大

梅^{新定と改して}く^{新定と改して}賀^{新定と改して}し^{新定と改して}常^{新定と改して}盤^{新定と改して}や^{新定と改して}志^{新定と改して}の^{新定と改して}お^{新定と改して}ち^{新定と改して}声^{新定と改して}

お^{新定と改して}せ^{新定と改して}れ^{新定と改して}二^{新定と改して}の^{新定と改して}う^{新定と改して}や^{新定と改して}ち^{新定と改して}る^{新定と改して}門^{新定と改して}の^{新定と改して}松^{新定と改して}仙^{新定と改して}角

門^{新定と改して}妻^{新定と改して}の^{新定と改して}〇^{新定と改して}れ^{新定と改して}奈^{新定と改して}奈^{新定と改して}や^{新定と改して}と^{新定と改して}痔^{新定と改して}の^{新定と改して}籠^{新定と改して}一^{新定と改して}水

浴^{新定と改して}巾^{新定と改して}の^{新定と改して}衣^{新定と改して}乃^{新定と改して}なる^{新定と改して}や^{新定と改して}〇^{新定と改して}の^{新定と改して}巾^{新定と改して}珍^{新定と改して}合

ち^{新定と改して}多^{新定と改して}く^{新定と改して}珠^{新定と改して}山^{新定と改して}く^{新定と改して}く^{新定と改して}輝^{新定と改して}の^{新定と改して}巾^{新定と改して}文^{新定と改して}美

年尾^{浴巾}

言水引付二

之因

ひ^{細谷}ら^{細谷}ひ^{細谷}て^{細谷}や^{細谷}百^{細谷}寿^{細谷}あ^{細谷}や^{細谷}き^{細谷}初^{細谷}次^{細谷}梨^{細谷}香^{細谷}

あ^{汗襟}ら^{汗襟}や^{汗襟}色^{汗襟}い^{汗襟}ら^{汗襟}く^{汗襟}蔵^{汗襟}一^{汗襟}か^{汗襟}好^{汗襟}寛^{汗襟}

萬^井國^井や^井梅^井の^井白^井と^井具^井の^井白^井井^井端^井

百^栴の^栴ち^栴ち^栴え^栴と^栴の^栴寸^栴蘭^栴や^栴白^栴の^栴栴^栴

雲^時や^時浅^時沙^時小^時拍^時子^時と^時日^時の^時

流^取と^取れ^取て^取氷^取矣^取と^取ま^取り^取て^取神^取の^取ゆ^取り^取矣^取

子^只玉^只や^只冷^只の^只玉^只美^只の^只信^只の^只布^只只^只身

早草

山^梨小^梨氣^梨と^梨と^梨せ^梨て^梨露^梨草^梨の^梨梨^梨苗^梨

翠^好草^好根^好の内^好か^好何^好と^好〇^好の^好れ^好好^好草^好也^好

鳥の子と積術あしこぬれ 井嶋
大ぢり世話もゆり のれ 栢曲
飛脚や吹のかきも子の苦 時習
藝やぬ脚芝の果の神祇也 笑神
舌も榎れや居るの 呂牙

文自

門松や引くもまゝ九十日 ぬ松

鳳凰の正春を養をの春 港水

苗葉の世やかれも 水陸

子尾

不為子靈や 花名あ一二寸 貝恒

子のれとつむ 廿日丸 唐衣

言水引付三

元旦

積雪の其かよ勇の神也哉

鷗よなましく 袴袴の肌 吹水

少領よりと私領 吹ゆる心 又可

其二

穀水の脱を 民の春

幼き幼よりゆる 富川 後松

白雲よ藤屑の住まをて 吹水

其三

初ま人びの色舞代を

雪あゝ 馬 精礼 下

下蒔子浦より 登る 後松

氣をこめて

梅子しとき六頃ねの復安家可矣 而部れし

白尾

其序の予も楚く予三心 舞行

帝子師と

去のやうて

本舎の奥出し候れこのころ 去夜

昔まよひの口言似と打果 市初

齒ゆや祝けきま房と 中村

せとみく 市初

元日

元日

面白や二露らぬ古目の如 才村氏

ありしころ 南初

言水川付五

元旦

忘の言小送 南初

く目のおよと娘の糸 今夜を

和の松阿の青柳の眉 初岡

全

姿後や十二高ををる即月 全

久しく早まあ 若落

誰う草の 鼓山

全

白や凌雲の羽の 全

囀の冠松の 一月 初岡

朧月おとの舞 初岡

元目

南極の照りたるやや个釣揚南歌 若月
松はし為帽すくの袖目報日 甚怪
目の眩をまきまきと云り日 珠衣
依保姫の睡るれ如乳上葛家 陸程
色の橙や栂と後夢の乱車南歌 尾柳

子尾

初都井了るこまるとののれ 以水
世も移月をちおつたのこも 陸程

元目

佐後列

吟後の長や受領の栂子次北氏 二部
久方や老白鷗のより日和内官 幸順

言水引付六

歳旦

止氏
尾松

ちまも柳栂と王城はせ

集ふ柳さる候み掛柳 曉水

胡蝶加賀具栂ル茶もをさめく 一色

全

言水

白卷は流人茶人の門傍

秀弄の窓は梅ひくく音 尻松

月影花は擲のたふれて 賢水

全

言水

身は毎の環るく 後解

蚕の思よりね前急 一色

簫の餘を傷氣子言と 尻松

備りて

流くもの思ふ代十流
その刀と揃うくと
自其のまらうと木の枝
よれて

全

示妻

乾小判向寅卯の得方哉 屋衣
乙比の今朝産長は宮軍 健下
菌園や乙道金右銀遠夏 只言
その名も紙園て起す 一夕
處為

言水引付八

龍胆

丹言保
世現

ちもの牝る女敵やむの三月
羽子の艶もも罪の阿_下吐 仲芝
鞆鞆女坊や中_下に打傘_下 佑式

其二

全

何ぞぞ鳴まら若の初曆
妻のよき_下に縁_下しく潮 世現
ゆめくと思ふ願_下とる 仲芝

其三

全

櫻より台謝の天_下の男
徳_下痛く萬_下孕_下を珍_下さやれ 佑式
去_下凡_下や角_下行_下のす_下り 世現
候_下也_下て

歳旦

正籠

千本照や又世後の如きの

去傍

台下のあわ布地ほ連中三ツ 加琴

凡かゝる妻の巴を添へて 妻去

二

く川ゆめやそを望と我の如

全

水は替へて煙少じ細 正籠

白雲のすさみ揚ぐら 出づる如 加琴

三

百賣や若ら海史百粒 全

柳の尻されぬよ 出づ 壺春

車より車の吸方蝶 出づ 正籠

言水引付十

年旦

宮澤

妻ありく謝の表野 表野 維石

子尾

新しき心のまき大母り 全

横笛は乳で鳴りやこれ 出づ

ち所八橋斗は鬼瘦らん 出づ 百外

髪をやはらぎくもわ 出づ 壺春

象やうら髪も 出づ 拙係

行 出づ 松流

糸竹ハワく寸袍瘡 出づ 正籠

たけ白求田村丸 出づ 者我

わを桶の古ハ消く 出づ 加琴

元目 一通

ゆきま押しつらぬる名

其を限よるら門ま全

和國丸車凡くを吹く帆と全

円

は代のま秋等もあはれ 近和

さうりふ

まの月

はつらや鴨の毛羽の海に円

まをや言砂の松の道 長

郊外浄の銅とてくれ 一生

言水門付土

西徳分四午

え目

何陽分極 玄詠

五振翅中柳も髪と割る

あふはたれと程ふ起解

声傳て飛ん甲子入雲雀

全

日本 遠風

北面の産の塵子や竹のま

清らつらささ小あやむむ

ふゆのま法朋り若侍と

全

日本 佳子

師の乳や七尺起る鏡解

筆子氣入のこちりま地

ふ代分春青以と終りて

全

田所 彦臣

盛信

折く段や今約事止此浪貞妻
解てとけく摺うれお名
蜂の巣も折えゆれおの梅

全

山田

手紙の類も裾の〜ら成
藤丸の刀う〜あ流し解
左巻

軍書

吾年道の氣ど〜れ
吾他や通ひす解〜

柳の苞、云就

引つる顔をとろ〜お音踏
松面の三丈迎され夜破り

豊後

大の字と活て三十〜
猿の心口〜一節も水

左巻

言也口付士二

歳旦

有松

友二

よみ捨て又並けて此お心

赤いほち〜云霧急の 脚 持山

あま〜ゆ〜
全

争せ〜ひ〜て〜
全

花開きて身ぐ〜 改 友二

豆こ〜け〜く〜
全

門松の奴模かり〜
全

お子や〜〜代〜の 照 友二

抑取の水〜〜
全

おん

友二

全

お子よ〜石あらし
ゆの和 畢入

〇尾

遊あそび纏まとて眉まゆを短たんだのれ 女メ三

ままひひらら縮ちぢままのままま 西西き

大梅オウメの

ちち〇〇三三年年目目のの栲カ落カ野ノ 括カ山

浪なみ信しんやや月つきとと罫からら久く子このの暮暮 畢畢入

行ゆひひのの舟ふねかかつつ信しん車車 以以笑

節ふしとと氣き志しのの名なををうう山山程程よよ 畢畢入

ううれれよようう

之之白

艘ふねのの松まつよよううらら穿くらら穿くらら暗くら月つき 畢畢入

ふふ水みづややううままのの水みづ道みちのの初はつ 以以笑

言水引付士三

元目

三列作書
山根清写

淺あさ解とりりふふりりををゆゆるる荒あぶぶ

ととれれののままややるる平へいのの代だい

徳とく立たつつ生せいくくととれれつつきて

全

日本
舟山子

草くさ葉はやや濃のけけ者ものががきき 三三列列作作書書

〇尾

昔むかし今いまやや信しん次じのの形かたち 波なみ瀧たき目め 舟ふね子こ

神かみ保たもりり日本にっぽん橋はしのの又また三三十じゅう目めい 酒さけ子こ

ああくくははららままのの氣きててやや 〇〇流ながるる 三三言ごん書ご

月つき形かたちららうう言ごんぬぬ方かたああししたたすす日ひ 投なげげ舟ふね

ゆゆめめをを寂さび寞も安やすんんのの言ごん 信しん次じ

正徳四年甲午年

洛陽を多近

書初

白梅園路雪水

四方の福と門元も何知意の細

とと義

り天外一帯らぬと云此情か

同

不本止

初元を梅がくくさるる武明

井筒松

國く此書と

重晴

とつて名の云

三徳四年甲午二月吉輝日

寺町圃二条上野

誂諧御三物所井筒屋庄在櫻枝行

